

アフリカでも感染拡大が続く COVID-19



上：学校菜園では野菜が順調に育っています。右：食事の際は、マスクをはずして「いただきます」



8月初めにアフリカ大陸の新型コロナウイルスの感染者総数は110万人を超えました。8月後半に入り、南アフリカ、ナイジェリアやケニアなどで感染者数の減少が報告されている一方、ルワンダやエチオピアなど、感染者数が増加している国もあります。これらの国では、これまで首都などの都市部に限られていた感染が、医療体制の脆弱な村落部に拡大していることが懸念されています。

観光が貴重な外貨収入である東アフリカ諸国では、ホテルやツアー会社などの観光業が大きな打撃を受けています。タンザニアが5月中頃、ケニアやルワンダは8月1日より国際線の受け入れや都市間の移動規制を緩和しました。

タンザニアは学校再開、ケニアやルワンダは引き続き休校措置を継続

タンザニアやザンジバルでは6月に入って学校が再開しましたが、ケニアやルワンダはコロナ感染の拡大が収まるまで、学校の再開を見合わせています。ケニアやルワンダの教育省はオンラインやテレビ・ラジオ番組を活用した遠隔教育を奨励していますが、通信網のない農村地域やテレビやコンピュータを持たない貧困家庭の児童が、授業を受けるのは困難です。また、両親や保護者が働いている日中に、家に取り残されたり、休校のため給食が食べられなくなった子どもも多く、健康や心のケアへの懸念が指摘されています。

TFTでは支援地域の状況に合わせて、学校再開後は給食を提供し、休校中の国では食材配布などの変則的な対応により、子どもたちが食の支援を受けられるようにしています。



給食用の食材を配布

ルワンダでは栄養価のあるお粥の支援を継続

ルワンダのバンダ村では、休校中も幼稚園児への食の支援を続けています。557人の園児が栄養価の高いトウモロコシ、大豆、稗（ヒエ）の粉に砂糖を混ぜたIgikomaと呼ばれるルワンダのお粥の材料を受け取っています。

村内で栄養失調と診断された子どもの数は、5月に46人だったのが、7月には24人増えて70人になりました。新型コロナウイルス感染症で経済的な打撃を受けた家庭もあり、子どもたちが必要な栄養を摂取できていないことが懸念されています。



作業後に屋外で食べる給食

ルワンダ政府は今後の学校再開後の新型コロナウイルス感染症の対策として、一クラス毎の生徒数を減らす方針を打ち出しています。

現在の校舎では教室が足りないため、生徒も含めた学校とコミュニティによる学習施設の建設が始まっています。生徒たちもシフトを組んで登校し、作業に加わっています。登校した生徒のためにTFTではお粥や食事を提供しています。



お粥の材料を受け取る母親

安心して学べる学校の再開を望む

長引く休校はバンダ村の児童に大きな影響を与えています。ルワンダ政府は安全が確保されるまでは、遠隔授業で代替するとしていますが、バンダ村のような非電化村ではオンラインを利用した学習は容易ではありません。コンピュータはもとより、多くの家庭はテレビやラジオを持っていません。またラジオがある家庭であっても、乾電池を買うお金を出し惜しむ親もいます。家計をやりくりする中で、乾電池よりも食料品などの購入が優先されるためです。

学校の先生は、両親や家族が仕事に出た後、家に残された子どもたちが規律正しく勉強をすることは難しく、村落部での遠隔授業は限界があることを感じています。ルワンダに限らず、新型コロナウイルス感染症によるロックダウン以降、家庭内暴力が増えていると国際機関が警鐘を鳴らしています。学校が再開されて、子どもたちが安心して学べる日が一日も早く来ることを、教師をはじめバンダ村の人々は願っています。



調理担当者もマスクを着用

ケニア：2020年度中の休校決定に反対の声も



休校中に宿題を提出する生徒

新型コロナウイルス感染症数が増加しているなか、ケニア教育省は7月に2020年の学年度を中断し、国内の全生徒が留年し、2021年1月からの新学期に学校を再開し、同じ学年を繰り返すことを発表しました。毎年11月に実施されている小学校と中等学校の統一試験も延期されることになりました。教育省大臣は、休校はケニアの児童の安全を第一に考えた対応と説明し、来年1月の学校再開は必ずしも最終決定ではなく、新型コロナウイルス感染者数の増加カーブが14日間連続して平たんになった時点で、再度対処を考慮するとしています。

この決定に対して反対がないわけではありません。休校措置を続けることは、児童の学ぶ権利をはく奪しているとして、保護者の代表が教育省を相手に8月に裁判を起こしました。また政治家や国連機関からも学校の早期再開を促す声が出ています。ケニアでは8月中旬よりコロナ感染者数が減少傾向にあり、学校再開について今後の動向が注目されます。

平常に戻りつつあるケニア社会

3月中旬に始まった移動制限は7月に解除され、夜間の外出規制を除けば、ケニア国内の移動には制限がなくなりました。マスク着用義務や飲食店の営業時間の規制、バーや居酒屋の閉鎖などは継続されていますが、ナイロビの街並みは日中は平常に戻りつつあります。

ただしMatatuと呼ばれる乗合い自動車は以前は14人乗りだったのが8人までと制限されたり、ショッピングモールやレストラン、国立公園に入る際には、必ず検温や手洗いをしなければならないなど、衛生面でのルールが課されています。

ナイロビでは着用必須のマスクは露店やお店で買えますが、ケニアの国旗や飲食店の名前の入ったマスクを店員さんがしていたり、おしゃれなケニアの人にとってマスクはファッションの一部として取り入れられているようです。



バケツに貯めた水で手を洗う親子